

ハンドード(三)

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

二十一

二十二

二十三

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

三十

三十一

三十二

三十三

三十四

三十五

三十六

三十七

三十八

三十九

四十

四十一

四十二

四十三

四十四

四十五

四十六

四十七

四十八

四十九

五十

五十一

五十二

五十三

五十四

五十五

五十六

五十七

五十八

五十九

六十

六十一

六十二

六十三

六十四

六十五

六十六

六十七

六十八

六十九

七十

七十一

七十二

七十三

七十四

七十五

七十六

七十七

七十八

七十九

八十

八十一

八十二

八十三

八十四

八十五

八十六

八十七

八十八

八十九

九十

九十一

九十二

九十三

九十四

九十五

九十六

九十七

九十八

九十九

一百

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四



滝の水

(五) 倉富砂邸

道を教へてやらう

其の事を聞いては日暮れる。

「それは能く承知してゐます。

彼は貴郎のたの説を實行してゐる

のですか。」

「然うか。全國の新聞雑誌に出

したからな。」

「三人とも、馬老人に向つた。

静馬老人は行衛不明ち

「孫は三人ある」

「左様々々、三人、おられまし

たな」

「三人とも、孫は行衛不明ち

や、先づ日本には居るまい」

「只今貴郎のたの側に居られる二

人について話したいのです」

「孫は未だ子供ぢやぞ」

「今朝、ちらりと見ました」

「何處で見たのかや」

「水星山に大きな滝があります

な、不動様のある」

「う、あの滝は十三尋の滝

である、あんな

處に孫が居る筈

ではない」

「馬鹿者ッ、其

れで迷信といふ

ものぢや」

「僕の感心した

のは、ものお二人

の至孝の精神

新念を凝して居

静馬の眼が光

つた。

「御隠居、僕は

感心したのです

と申すみちや、あの不動明王は

俺の先祖の大友氏が、深く信仰

したまこと云ひ傳へ

たまこと云ひ傳へ

たまこと云ひ傳へ